

## 松居直の絵本観・読書観

干場 愛美

本研究の目的は、松居直がどのような絵本観・読書観をもっていたのかを明らかにすることである。日本の絵本観は、戦前には教育性や美的感情や観察力を養うことに価値が置かれ、戦時中になると読み物としての注意が払われるようになり、戦後にはく岩波の子どもの本>や『こどものとも』を契機に絵本の読物観が強まったと言われている。戦後の日本の絵本観を代表すると言われるものに、著作『子どもと文学』や絵雑誌『こどものとも』などがある。本研究の対象である松居直は、これらを手掛けるとともに、自身でも絵本の文章を執筆するなど、多面的に絵本に関わっていた人物である。従来行われてきた研究は、主に松居直が創刊・編集した絵雑誌『こどものとも』を対象とした研究であり、松居直自身に関する研究は行われてこなかった。

そこで本研究は、松居直が注目していた読み物や絵本、評価していた人物や作品の傾向、読者である子どもと絵本の間をどう捉えていたかを考察することを通じて、松居直の絵本観・読書観を明らかにすることを目的に、松居直の著作を用いて文献研究を行った。具体的には、読み物を表す語・絵本の種類を表す語・人物名・作品名を文脈とともに抽出し、松居直がそれらに対してどのような意識を持っていたか明らかにすることを試みた。

分析の結果、松居直が著作において注目した読み物としては絵本、物語、昔話、子どもの本が挙げられた。絵本については、とくに昔話絵本、物語絵本、赤ちゃん絵本に注目し、それぞれの評価点として、昔話の特質にそって表現している点、文と絵がお互いを引き立てあう点、親と子の交流の機会になりうる点を挙げた。言及回数の経年変化からは、物語や物語絵本には長い期間にわたって言及しているのに対し、昔話や昔話絵本に言及した時期には波があることが明らかになった。

また、松居直が評価した作品や作家の分析からは、松居直が国に関係なく絵本や絵本作家・画家を取り上げていたことが分かった。関心を寄せていた作家の共通点には、自分の世界を持っている点、真摯に子どもに向き合う姿勢が挙げられた。また、松居直が関心を寄せていた作品の共通点には、伝えたいテーマがある点、絵が物語っている点、細部まで行き届いた緻密な描きこみがあり、そこから世界観が生まれている点、共感ができる点が挙げられていた。これらを備えた絵本は、共感し、その世界に入ってゆける「楽しい絵本」であり、松居直は「楽しい絵本」を評価していた。これは、大人である親と子どもの共通の体験としての「絵本体験」が、子どもの安心感につながり、子どもの成長の中で重要な役割を果たすという松居直の主張に繋がっている。さらに、本研究では、このような松居直独自の「絵本体験」という捉え方は、彼自身が信奉するキリスト教における神の言葉に対する姿勢と共通する面が見出せることを指摘した。

(指導教員 原 淳之)